
マイファンタジー

水の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイファントジー

【Nコード】

N4538F

【作者名】

水の子

【あらすじ】

ずっと一人で物語を考えていた。最近携帯のメモに書き込んでいる。……………寝る前に物語を書いていたら、急に目の前が真っ白になって！？気付いたら僕の考えた物語の中。夢じゃない、痛みもある。だとしたら僕は……。警告血の表現があります、それほど上手くはありませんが苦手な人の為に……

第？話：七人目の勇者の最後の言葉

誰かの作ったおとぎ話のように、全てがハッピーエンドじゃない。

多分、僕の人生はこれに当てはまると思う。

エピソード（前書き）

プロローグがエピソードになっていますが仕様ですのでお気になさらず。

エピソード

エピソード

雲一つ無い晴れた日に薄汚れた床に夕陽のような赤が広がった。

真っ白な外壁と真っ白な門が見える、 少しばかりの木が生えた
荒野に巨大なそれはあった。

それは魔王城、そこに君臨するのもまた…… 勇者が創った物語の
被害者。

ここは、その魔王の君臨する王室。

「フハハっ、もうじき毒がまわる。貴様もこれで終わりだ」

魔王が言う、どうやら勇者は負けたようだ。

魔王は笑う、もう楯突く者はいないから。

「フフっ……確かに僕はここで死ぬ、でも終わりじゃない」

勇者は言う、そうなるのは当たり前。

勇者は笑う、だって僕が考えたのだからと。

「お前だって時期に殺されるさ」

そう言って勇者は笑う。

勇者はずっと笑ってる、だって勇者の死は魔王が倒されるまでの
物語の一つだから。

「僕の死はただのプロローグ、今から始まるんだ……お前を倒す物語が」

血まみれの勇者は笑う、自分は何も出来ない……咳き込むだけで口から赤が溢れ出てくる。

勇者の周りにはもう自身の深い赤で染まっている。

けれど勇者は笑う、だって未来はもう知ってる、自分が死んで魔王も死ぬ。

「聞きたい事がある、何故人間嫌いなお前が」「この世界を救うのか？　でしょ？」

聞かれる事も分かってる、ここに書いたから。

魔王は右に行ったり左に行ったり、落ち着かない。

「仲間か？　それとも約束か？」

勇者は黙って首を横に振る。

勇者はそんなくだらない事で命をかけない。

一人目の勇者は優しさが足りない、だってモデルは自分自身なんだから。

「僕が創った世界だ……僕が守ってたっていいだろ？」

勇者は呟く、力の無い声で。

「最初からお前の負けなんだ！」

振り絞って叫ぶ、最初から魔王の負けは決まってる。

時間はかかるけどねと勇者。

「あい……む……ブロック……いず……マイファンタジー！」

I · a m b l o c k i s m y f a n t a s y .

滅茶苦茶な言葉、けれども勇者は守った訳だ、自分の世界を自分の……。

「僕、は……きみを……君を救えた?……」

笑いながら勇者は死んだ、滅茶苦茶幸せそうな顔で。

……自分の死をもってして。

「……死んだ……か」

そう呟いた魔王の足元には水たまり。

勇者の書いた最初の物語は、自らの死。でもそれは、全ての物語と繋がっていて最後にはハッピーエンドに……

第一話：始まりはいつも突然で……

第一話：始まりはいつも突然で……

この物語はハッピーエンドになるまでの悲しい運命を辿った多数の勇者の始まりになった一人の勇者の物語。

昔から物語はいっぱい書いてきた、でも一度だって完結させた事はなかった。

深夜二時半、狭い僕の部屋のベッドの中、物語を考えていた。

もう少しで完結する、そんな所でずっと迷っていると、あるアイディアが浮かんだ。

それからクライマックスまでを一気に書き上げた。

やっと完結、そろそろ寝ようかな……眠くなってきたし。

そんな事を考えていると目の前が急に真っ白になって……

暗闇が晴れると、そこは木々に囲まれた森の中だった。

「ここは……僕の考えた……」

そう、ここは勇者が考えた物語の世界。

そしてその物語の始まりはたしか……。

「混乱する勇者に三匹の魔物が、って……まさかね」

混乱する勇者に三匹の魔物が襲いかかる。

「くそっ……誰だよ、こんな目のくりくりした可愛い狼に襲われるなんて設定にしたのは！」

それはもちろん勇者である。

魔物は勇者の肩を少し切り裂き馬乗りになった。

「んっ……くっ」

尚も魔物は勇者の足や手、肩を切り裂き続けもう勇者は血まみれだ。

「くっ……フレイブ！」

最初の仲間登場と言う基本パターンをぶち破り勇者は、魔法を使った。

「キャウン!？」

三匹の魔物は一瞬にして火に包まれ、しばらくして灰になった。

なんとか魔法を使い魔物を倒した勇者だが、もう虫の息だ。

ここで終わりか……。

「困りますよ、そうだったら」

綺麗な透き通った声、茶色のロングヘアーに白い天使の翼。
現れた女性は間違い無く勇者が考えた天使だった。

外見から想像して勇者と同一年ぐらいのまだ幼い天使だった。

「お休みなさい、勇者さん」

天使はそう言うと言者と勇者に回復魔法をかけた。
あれ、眠たくなってきた……お休み……。

勇者が目を覚ますと天使の声が聞こえた。

「起きましたか、もう大丈夫なんですか」

優しく穏やかな声に少し安心した、そう言えば全く痛む場所が無い……魔物に切り裂かれた傷も、あとも残らず消えていた。

「ありがとう、おかげで助かったよ」

「いえ、気にしないで下さい。そうゆう運命ですから」

そう、こうゆう運命なんだ、この娘も魔王の……

「あつ私の名前はカレン・コバーン、よろしくです」

カレンがそう言うと真っ白な歯が見えた。

「うん、よろしく」

ちなみに少し無愛想だけど、僕は高一からの引きこもりだから人との話し方を忘れたただけだからね。

……そっそうだ、簡単にこの世界を振り返ろっかな。

まずはこの大陸の名前は、確か……>ジェミニ大陸<その名の通り、ひょうたん型の大陸で真ん中部分は非常に細い。

次は魔王について、魔王の名前はルビー。

平和なジュミニ大陸にいきなりやって来て、一気に大陸全土を支配した。

最後に僕の目的は……魔王を倒し、捕らわれの姫様を助け姫様の力で元いた世界に戻ることに。

まあこのままいくと僕は……

まあそんな事はどうでもいいや、自分が考えた事だしね。

この名前は全て友人が名付けてくれたもので、自分で考えたものじゃない。

だって僕はネーミングセンスゼロだもん。

「お腹すきましたね」

そっぴゃ、お腹がすいた……。

「何か取ってきますね」

そう言つてカレンは元気よく飛び出してつた。

しばらくしてカレンが戻ってきた。

「すみません、こんな物しかありませんでした」

少々悲しげに言うカレンだが、取ってきた物は果物など。
これだけあればいいんだけどね。

「ありがとつ、君がいてよかった……」

勇者の素直な気持ち。

勇者がそう言つとカレンは顔を赤らめ少し目を勇者からそらす。

さて、カレンに一番近い町に案内してもらっているんだが、遠いな……ずいぶん。

「すみません、もう少しでつきますから」

勇者の顔でさつしたのかカレンが答えてくれた。

「ごめん……」

僕が書かなければこんな事には。

「気にしないで、これが運命ですから」 勇者の運命を知る数少ない登場人物。

妙に嬉しかった、自分で言わせたんだけど……。

「そういえば、勇者さんの名前は？」

「無い……」

正確にはある、響きがいいが自分には似合わない。

「じゃあなんて呼べばいいですか」

うーんどうしようか……このさいカレンが適当に決めて、僕はネーミングセンス無いし。

あつても、僕が考えたキャラなんだから一緒か。

「うーん、勇者のユウさん」

「却下」 大好きな親友の名前で呼ばれるのは嫌だよ。

「創造主のソウさん」

目を輝かしてこちらを見るけど結論却下だ。

「うーん……」

滅茶苦茶考えてるカレンはとても可愛い。

「……………勇者さん」

「何？」

結論

僕は勇者、名前はない。

それから少しボーっと空を見ながら歩いた、森といっても空ぐら
いは見える。

「勇者さん、まずは武器を買いましょうか」

いつのまにか町にっていた。

第一話：始まりはいつも突然で……（後書き）

マイファンタジー第一話はどうでしたか？

感想をお待ちしています。

楽しんで頂けたなら下の

「巨大小説図書館」をクリックでランキング協力お願いします。

ではまた次のお話で。

第二話・デビルツリーと呼ばれるには……（前書き）

途中放棄は絶対しません。
では本編をどうぞ。

第二話：デビルツリーと呼ばれるには……

第二話：デビルツリーと呼ばれるには……

ここはカレンの住んでいる町、

「サヒイカス」活気あふれる町で初めて来た僕にさえ、声をかけてくれる町の人達。

こんな世界にも優しい場所があるんだなと自分で作っておきながら思う。

そんな事を考えているとカレンが話かけて来た。

「勇者さんの武器は勇者らしく剣と盾ですかねえ」

そうだね、基本魔法は使えるし。

僕には少し重いくらいの剣と反対に羽のように軽い盾をカレンが買ってくれた、本当にこんな盾で大丈夫だろうか。

カレンはどうやら魔法が得意らしく、持ち主の魔力が上がる杖のような武器と僕と同じ盾を買ってきた。

杖と盾って以外と見栄えいいんだ……。

「武器も整えたいいきますか」

次の町では、僕の大好きな人に……。

森の町の逆側はいきなり何も無い荒野、岩や木さえも無い。

「町どころかモンスターさえ見当たりませんねえ」

そうゆう設定ですから、フフッ。

もう二時間近く歩いている、もうダメとか思っている……

こんな荒野には不釣り合いな桃色の花を満開にした立派な大木が突然目の前に現れた、これは元いた世界の桜の木と同じ……もつともこんなに大きい訳ないけど。

どれぐらい大きいのかと言うと……。

「勇者さん勇者さんっ！ 見て下さいよこのデビルツリー……不吉ですね、しかも三十カルズぐらいありますよ」

一カルズは元いた世界の一メートル、つまりこの桜の木は三十メートルもあると言う事になる。

ちなみにこの世界の桜の木がデビルツリーと呼ばれるには訳がある、この木は荒れ果てた……いわゆる荒野にしか根をはらず一年中花が満開だから、しかも遠くからは何故か見えない。

それ故にこの木はデビルツリー「悪魔の木」と呼ばれている。（
世界の木大全集より）

少し話がズレてたけどわかったかな。

「こんな木を見た時はどうすればいいかわかりますか勇者さん？
答えはですねえ……見なかった事にしちゃえばいいんですよ」

……さて、このデビルツリーが見えたという事は……。

「あつ！ 勇者さん、見えて来ましたよ」

ほら来た。

やっと次のキャラの登場か……

第二話・デビルツリーと呼ばれるには……（後書き）

マイファンタジー第二話はどうでしたか？

感想をお待ちしています。

楽しんで頂けたなら下の

「巨大小説図書館」をクリックでランキング協力お願いします。

ではまた次のお話で。

第三話：救う為の戦い

第三話：救う為の戦い

ここは魔王ルビーが住む魔王城、勇者達とは違う視点。

青い軍服と青色のショートカットが目立つ男が立っている、青はカルダ共和国を表す色、黒は魔王を表す色、故に魔王が現れてからこの大陸では黒の装飾品は禁止されてきた、しかしこの男の耳には黒い魔王軍のピアスが……。

「ライト……ライト!」

勇者と同じ十七、十八歳ぐらいの男が軍服の男を呼んでいる。

「何かようか? 魔王……いや、ルビー、いやでもやっぱり魔お……」

ライトと呼ばれた男は振り向かずに答えた。

「どっちだっていいさ……それにしても本当に無愛想な奴だな、振り向きもしないで……まあいい、そんな君に行ってもらいたい町があるんだ」

そう言つと魔王……もとい、ルビーは苦笑まじりに不気味に笑つ

た。

視点は変わって勇者達に。

さて、ここは確か……「ミラス」って町だったかな。

「勇者さんっ、早く入りましようよ」

「うん、そうだね」

「あっ！ 珍しいですね、勇者さんが相づち入れるなんて、いつもは頷くだけなのに」

うーんそうかなあ、とにかく入ろうか。

「とりあえず勇者さんは町を探索して下さい、その間に私が宿の予約入れて来ますから」

しばらく町を探索したが何も無い、流石は荒野の町って感じだね。

「勇者さん、とりあえず宿の予約は入れて来ましたよ」

それにしても、この町は「サヒィカス」とは違って人も少ないし、町全体が……。

「ちよつと勇者さん！ 無視とはどう言うことですか！」

「わっ！ ちゃっ、ちゃんと聞いてるよ」

とりあえず謝ったけどまだ怒ってるのかな？ 腕を振って頬をふくらましている……てゆか、めちゃくちゃ怒ってる。

「もう！ 早く宿に行きましょう」

「そっ……そうだね」

そういえば、話の続きわすれちゃった……この後どうなるんだっけ。

とにかく宿に入ろう、ここは寒いや。

今は夜の八時、たしかにもう夜だがこの町は他に比べて人通りが少ない。

そんな時に窓の外を眺めていると……。

「あつ！ あの人は……」

そんな町に一人歩く男がいる、青い軍服に身を包んだ男が。

気がつくと僕は外に出て男に話かけていた。

「何かようか」

無表情な整った顔、本来は希望に溢れ輝いている筈の蒼い目は光を失いほぼ黒色と変わらない。

そこまで君を追いついたのは僕……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……。

「何を泣いてるんだ？」

気付けば僕の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「用がないなら話かけるな」

軍服の男は冷たく言い放つと背を向け歩き出した。

「いつ……行かないで！」

僕が叫ぶと彼は振り向いた。

「悪いのは全部……魔王だ」

僕は確かに見た、全てを諦めたと思っていた彼の目の奥に蒼い炎が揺らいでいるのを……彼の真っ直ぐな瞳を。

「てか、お前は何もしてないだろ？」

違うんだ……悪いのは僕、変えられたのに変えなかった僕なんだ。

「とにかく、この町から出るんだ」

嫌だ……だって、ここで逃げたら……。

「嫌じゃねーよ、襲うんだから」

「僕は勇者なんだあ！」

「なら、なおさら逃げろ」

「背中傷は男の恥だあ！」

「お前は女だろ……」

「女でも僕は勇者なんだぁ！」

「二回目だし……、てかスカートの勇者って……」

僕は何を言ってるんだろっ、彼を……ライトを止めるつもりでここに来たのに。

逃げたくないんだ、誰かに責任をなすりつけてまで生きたくないから。

「君がこの町を襲うなら！」

僕はここで散ってでもそれを止めるから……。

君が魔王に縛られているなら……。

「魔王なんて……僕が倒すから！」

言っちゃった……本当は倒せないのに。

でもっ……でもっ僕は君を救いたいから。

「なら、止めてくれよ？ ……俺を」

うん、僕が止めるよ。

ライトは優しく微笑んで、僕の頭に手を置いたと思うと急に眠たくなってきた。

「でも今はおやすみだ、明日の昼十二時に門の前で会おう」

待つてよ！ まだ言いたい事が、駄目だ、意識が……。……………

……………

窓から朝日が入ってくる、昨日はいつ寝たんだったけ。

「えと確か……………！」

「勇者さんってばいつまで寝てるんですか、もう十二時ですよ！」

カレンが入った勇者が寝ている筈の部屋はもう誰もいなかった。

「えっ？ 勇者さんは……………？」

何も言わずに出て来ちゃったけど、カレン怒ってないかな。

その時、ライトが数十頭の魔物を引き連れて現れた。

あの森で僕が最初に倒した狼型や最強と言われる悪魔型、と魔物の種類は様々だ。

「へえ、本当に来たんだな」

「当たり前じゃないか……………僕は君を止めるんだから」

「死ぬぞ？」

「少なくとも君を止めてからね」

この勝負の結果は僕がこの物語の作り手じゃなくとも分かるだろうね、相手は六年前までは十六歳と言う若さでカルダ共和国の軍隊の総隊長をしていた男……六年前に魔王が現れてカルダ共和国が壊滅した時から魔王軍の総隊長になった訳だけど。

「さて、始めようか……勇者君」

それでも一応は女の子なんだけど。

「戦の最中に考え事か？」

気がつくともライトが目の前で剣を振り上げていた。

金属同士がぶつかり合う高い音、それを間近で聞こえたと言う事は……。

「邪魔をするのなら……容赦はしない」

同時に地面に血が落ちる。

彼の一撃を完璧に防ぐ事なんて出来ない、風で標的を斬りつける風の魔剣士だから。

「うつ……ぐつ」

深く入ったのかな？ 血が止まらない、それにめまいが……。

「今からでも遅くない、この町から逃げるんだ」

「やだよ……」

「お前は勇者だろ！？」

「勇者だから戦うんだ！」

何も救えない勇者に魔王なんて倒せないから……。
剣を何度も振る、でも空を斬る音ばかり聞こえる。

剣を振るたびに斬られた左腕から鉄臭い赤が噴き出す、それと同じ時に激痛が走る。

「もう止めろ、出血多量でホントに死ぬぞ！」

君の心の傷はこんな物じゃない……。何もかも失った君に比べたらこんな傷。

「僕が救いたいのは……。他人なんかじゃない」

第一、僕が創ったんだから他人なんかじゃない。

「僕が救いたいのは……。僕が創った、この世界なんだ！」

ただの偽善かも知れない、でもあの時こんな物語を書かなければ
って思うと死にそうなくらい胸が痛くなるんだ。

「全てを焼き尽くせ、煉獄の裁き」

僕が使える最強の魔法、狙ったのは彼じゃなく後ろにいる魔物達。

空から巨大な炎が降り注ぎ、魔物達を一瞬にして焼き尽くし悪魔
系の魔物さえ灰になる事も許されなかった。

「なっ、最強レベルの……。Lv.十の光と炎の融合魔法!？」
彼は驚いているけど……。体が動かない。

やっぱりあんな魔法僕には早かったよね、反動で動けなくなるなんて。

ふと前を見るとライトが僕に剣を突きつけていた。

「何故、俺を狙わなかったんだ？」

理由なんて決まってる。

「僕が倒したいのは君じゃなくて魔王だから」

そう言つと彼から冷たい視線が返つて来た。

「殺したいなら殺せばいい、君がそれで救われるのなら僕はそれでも構わない」

「俺の負けだよ」

なぜ？ 僕はもう動けないんだよ？

「お前は俺を止めたい訳だ、でっお前は魔物を全滅させた……俺一人じゃ流石に襲えねえよ」

そっかぁ……僕は君を救えたのかな？

「救えたさ……疲れたろ、もう寝りな」

うん、おやすみ……またいつか……。

気がつくとそのは宿のベッドの上で、窓の外を見るとお天道様は

もつてっぺんまでのぼっていた。

「あつ勇者さん……もう大丈夫ですか？」

カレンの心配そうな声、僕は大丈夫だよ。

彼女の話によるとライトがここまで運んでくれたらしい。

「勇者さん、そろそろ行きましようか」

そうだね、早く行かないと野宿になっちゃうし。

町の門を出るとそこには僕の放った魔法の跡。

彼……ライトとはまた戦う事になる、君を本当に救うことなんて出来ないのかも知れない、それでも僕は……何度でも君の為に血を流すよ。

それが全てを創った僕なりの……。

第三話：救う為の戦い（後書き）

さてさて……勇者さん実は女の子でした。
ビックリしましたか？

勇者さんは負けてしまいました。が、何やらまた戦う的な事を言っていましたね、今度は勝てるのかな？

次の話は何故ライトは魔王軍にいるのか……それを明らかにしたいと思います。

では、また次の話で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4538f/>

マイファンタジー

2010年12月10日14時40分発行